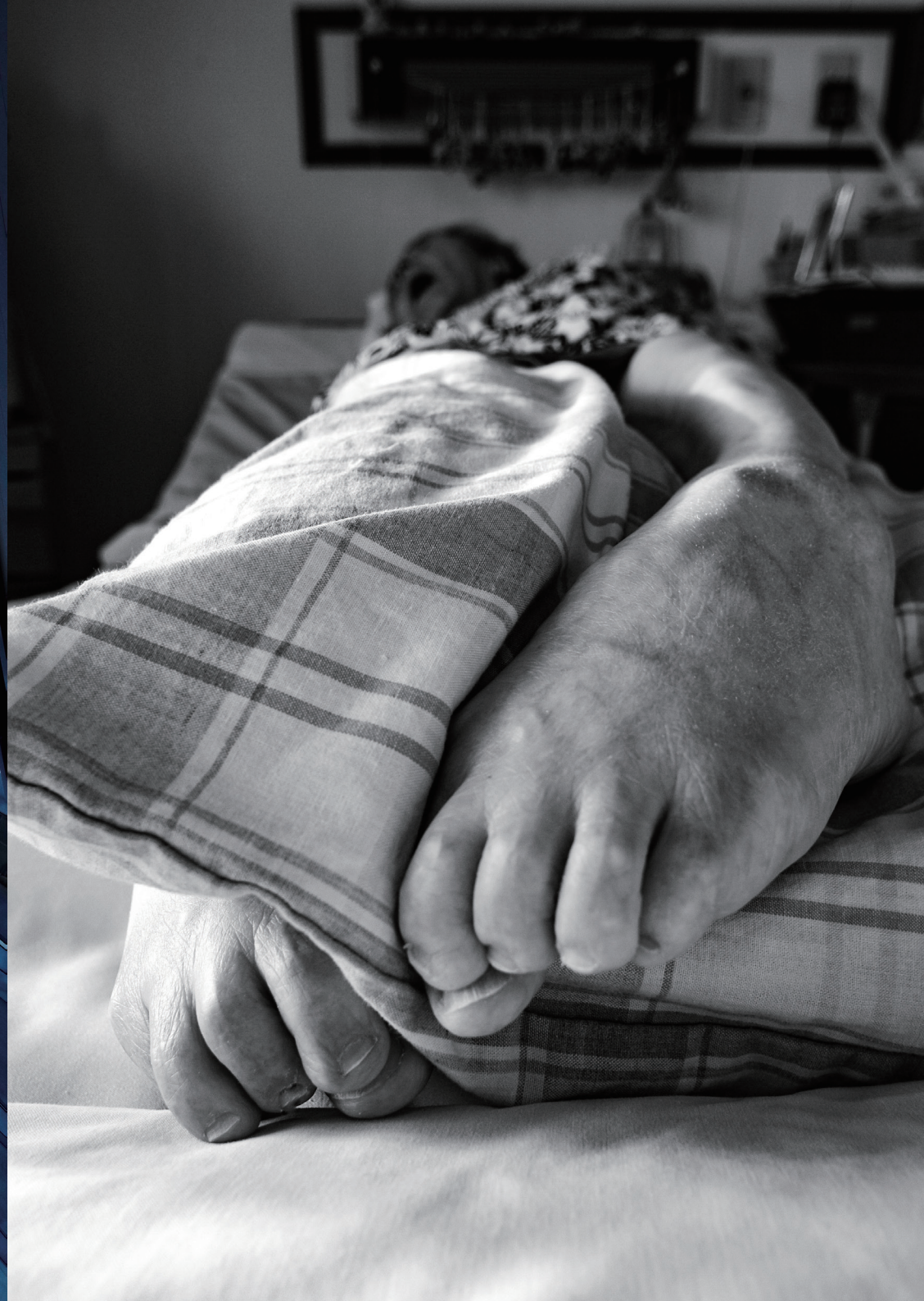

contents

まえがき 18

1 母の不安 25
母の変調 26
手帳 27
母の奇行 31
心をたどる 33
一人でも側にいてくれたら 35

2 春はわかるか 37
花見の日は 38
その馬鹿 39
感じる桜 41
瞳の中の桜 43
人の価値とは 45

3 アルツハイマーという恥 49
認知症が恥ずかしい 50
笑う者 53
揶揄される認知症 56

4 こちらとあちら 59
「わかる」と「わかろうとする」 60
認知症というあちら側 61
こんなところ 63
おばあちゃんの世界 65
わかろうとし続ける 68

5 する側とされる側 73
写真の距離感 74
パーソナルスペース 76
笑顔が伝えるもの 79
言葉以外で伝わるもの 81
眼で聴き、耳で視る 85
人の後ろに隠れる物語 87
存在に耳をすます 90

6 母の存在を感じる 95
「らしさ」とは 96
存在を感じるということ 99
母は海のようで木のようで 102
マニュアルを超えて 106

7 月の介護 111
時間の流れの違い 112
月の介護 114
時間の密度の違い 116

8 消すことができないもの 129
母に言葉がなくてよかった 118
言葉を翻訳する 120
誰にも聞いてもらいたい叫びがある 124
聞くことのできない現場 127
介護と戦争 130
微笑みと温度 133
化粧の時間 137
消し去ることができないもの 139
母のライスカレー 141

9 五時間の距離 145
父の入院 146
父の死 149
母を施設に捨てた日 153
先生、がんばれ！ 155
遠距離介護 156
母のあゆみ 159
重い扉 163

10 介護に潜む闇 167
一人ではない 168
カタルシス 170
言葉にして吐き出す 172
ウンコとよだれの臭い 174
苛立ち詫びる 178
親ゆえの闇 180

11 胃ろうと人工呼吸器 185
舌根沈下 186
人工呼吸器 188
胃ろう 192
新幹線の中で 196

12 ゆっくりな死 199
少しずつ手放していく命 200
天衣無縫の母 203
命を全うさせる 205
母の最期 207

13 支える側が支えられるとき 213
絆 214
介護の中の幸せ 217
生きることは汚れること 220
母の残した日記 222
身体の記憶 225
人生の地図 227
母という存在からの問い 229
支える側が支えられる 233

あとがき 236

1

母の不安

母の不安

写真●藤川幸之助

母の変調

父と母は、熊本の片田舎の小さな町で呉服屋を営んでいた。呉服屋といっても名ばかりで、セーターやシャツ、下着、帽子に至るまで衣料品全般を売る店だった。教師を続けたかった父は不承不承家業の呉服屋を継ぎ、「商売は俺には向いていない」といつも言っていた。小さな店でも、母の商品の見立てと明るい接客でそれなりに繁盛していた。母は、とてもきれい好きで几帳面な性格だった。そのためか、私も兄もとても厳しくしつけられた。約束したことができないと許してもらえなかった。子どもだけでなく自分に対しても厳しい母だったが、反面他人にとても気をつかう性格でもあった。

そんなしっかり者の母に少し変化がみられるようになった。私は熊本の実家を離れ、長崎に住んでいた。安否確認もかねて、毎日決まった時間に電話をかけると母が出て、まったく同じ話をして同じことを聞いてくるものだから、すぐに父に代わるように促した。父からは、母が同じことを何度も聞いてきたり、日記に毎日同じことばかり書いていたり、面倒くさがって料理を作る日が少なくなったり、物をなくすことが多くなったりと、その変わり様を聞かされた。

母はまだ60歳を超えたばかりの頃だったので、病気だなんて考えもしなかった。年のせいだと高をくくっていたが、食料品店に買い物に行った際に、母が棚に置いてある饅頭のパックを勝手に開けて食べ始めたことを父から聞いたとき、もしかしたら病気かもしれないと、不安のようなものが心を過ぎった。

手帳

母の手帳の存在に気づいたのは、父、母、兄、私の家族4人で話をしていたときのことだ。どんな話をしていたかは覚えていないが、母が何度も同じことを聞いてくるものだから、私たちはうるさくなって、母を放ったらかしにして3人で話を進めていた。母が病気だなんて知るはずもなく。とにかく、自分の話を始めようとする母に私は苛立って、「自分の話ばかりすっとは、

やめてくれんね」と冷たく言い放った。そんな母を邪魔者にして、3人の話は弾んだ。「ちょっとあんたは黙っときなさい」と父に言われ、「母ちゃん、ちょっと静かにして」と兄に言われ、「うるさかね」と私に叱られて、母は黙り込んでしまった。

話に夢中になっている間にふと気づくと、母がいなくなっていた。トイレにでも行ったのだろうと思ったが、あまりにも長いこと帰らないので、探してみると、三面鏡の前で何かを声に出して読んでいた。耳をそばだてると、母は何度も父の名前を唱え、頁をめくり、兄の名前、私の名前を繰り返していた。そして、最後に自分の名前と呼び名である「おかあさん」を何度も唱えて、ふと立ち上がり、振り返った。母の手には手帳が広げられて乗っていた。母は私に気づくと、慌ててカバンの中にその手帳を押し込んだ。記憶の中から消え去ろうとしている自分の連れ合いの名前や息子の名前を必死に覚え直し、自分の呼び名を忘れまいとし、また3人の話に入ろうとしていたのだ。

母は、3人のところに戻ってくるなり、いつもは「幸ちゃん」と呼ぶ私の名前を「藤川幸之助さん」と呼んだ。父と兄は驚いたが、私はさっきのこともあって、わざと「なあに?」と言ってあげた。その日、初めて母にとって成り立った会話であった。母は安心した顔をしていた。父と兄は不安そうな顔をしていた。私も心の中で、これは何かの間違いだと思っていた。

このことがあってから数日後、私は医師に母の病状を尋ねた。医師は、認知症の初期の頃は、自分の名前がわからなくなったり、家族の名前や顔がわからなくなったり、この世界がわからなくなったりすると言った。母にはその自覚があって、どんどん病気が進んでいるとのことだった。「おかあさん」という言葉や「藤川キヨ子」という名前を忘れていく自覚の中で、得体のしれない不安と母は戦っていた。忘却の恐怖もあったろう。家族や周りの者が自分を受け入れてくれない寂しさもあったろう。「同じことを何べんも言わんで」と叱る息子の冷たい言葉も悲しかったろう。その行き場のない気持ちを表す言葉さえも、日を追って失っていく。私は、意味のわからない会話にうなずくふりをしていた母のことを思い出した。そして、医師の前でいたたまれなくなり、涙をこぼした。

母が決して誰にも見せなかったあの手帳。黒い背張りの古い装幀の手帳で

ある。それは隠すようにいつも母のバッグの底深く沈めてあった。母はそのバッグを肌身離さず持ち歩いた。枕元に置き、見張るように寝た。手帳には、父と兄と私の名前と誕生日、年齢、電話番号が、それぞれ見開きの頁に大きく書いてあった。それらの後には、自分の兄弟、姉妹や父の兄弟姉妹の名前がびっしりと並んでいて、その一つひとつの名前の後には、きちんと丁寧に「さん」と書かれていた。そして、手帳の最後には、「さん」が唯一ない自分自身の名前が、ふりがなを付けてどの名前よりも大きく書いてあった。そこには、上から何度も鉛筆でなぞった跡があった。母は、何度も何度も自分の名前を覚え直しながら、これが本当に自分の名前なんだろうかと、薄れゆく自分の記憶にほとほと嫌になっていたに違いない。母の名前の下には、鉛筆を拳で握って押しつけなければ付かないような黒い小さな点があった。その黒点は、2、3枚下の紙もへこませるぐらいくっきりと母の無念さを映し出して残っていた。あの黒い手帳が、今は静かに私の掌の上にある。

母の奇行

あるとき、目を離した隙に母がいなくなった。どこをどう捜せどもいない。橋から落ちて死んでいたらどうしようか、車にはねられていたらどうしようか、生きていてくれと、涙を流しながら一晩中探した。母は、亡くなった父と二人でよく行ったストアの脇のコンテナの裏に隠れるようにじっと座っていた。それ以降、うろうろとどこかへ行こうとする母をいつも制止した。「何で俺が忙しかときに限ってうろうろするとね。どこにも行くな！　うろうろすんな！」と。母の命を守るのも私の責任だと思った。

認知症の母の行動を止めさせることにやっきになっても、奇行はなくなるどころかずっと続いた。母のそれを奇行だと思い、やめさせることばかり考えていた私には、母の気持ちなんてみじんも感じることはできなかった。自分の楽しさや快適さのために母は邪魔者だったのである。

そんな私でも、だんだんと母が言葉を失っていくと、母が話をしていた頃が懐かしくなって、あの家族団らんのことを思い出すことが多くなった。な

藤川幸之助

Fujikawa Konosuke

詩人
児童文学作家
日本児童文学者協会会員
写真家

1962年、熊本県生まれ。
長崎大学教育学部大学院修士課程修了。
小学校の教師を経て、認知症の母親の介護の経験をもとに、
命や認知症を題材にした詩を作り続けている。
また、認知症への理解を深めるため全国各地で講演活動を行っている。
これまでの講演回数は400回を超える。

◆◆◆主な著書◆◆◆

『マザー』（ポプラ社、2000）
『ライスカレーと母と海』（ポプラ社、2004）
『君を失って、言葉が生まれた』（ポプラ社、2006）
『大好きだよ キヨちゃん。』（クリエイツかもがわ、2006）
『やわらかな まっすぐ』（PHP研究所、2007）
『満月の夜、母を施設に置いて』（中央法規出版、2008）
『この手の空っぽはきみのために空けてある』（PHP研究所、2009）
『まなざしかいご――認知症の母と言葉をこえて向かいあうとき』（中央法規出版、2010）
『手をつないで見上げた空は』（ポプラ社、2012）
『徘徊と笑うなかれ』（中央法規出版、2013）
『命が命を生かす瞬間』（東本願寺出版、2013）
『支える側が支えられ 生かされていく』（致知出版社、2020）
『おじいちゃんの手帳』（クリエイツかもがわ、2020）
『赤ちゃん キューちゃん』（クリエイツかもがわ、2020）
『一本の線をひくと』（クリエイツかもがわ、2020）

◆◆◆

講演等のご依頼は、下記URLよりお願いいたします。
http://www.k-fujikawa.net/kouen_entry.php

母はもう春を理解できない
認知症という旅の物語

2021年1月20日
第1刷発行

著
藤川幸之助

発行
株式会社harunosora
神奈川県川崎市多摩区宿河原6-19-26-405
TEL044-934-3281●FAX044-330-1744
kabu.harunosora@gmail.com
http://kabu-harunosora.jimdo.com

装丁・デザイン
尾崎純郎

印刷
半七写真工業印刷株式会社

©Fujikawa Konosuke 2021 Printed in Japan
ISBN978-4-9911367-2-6 C3036
定価はカバーに表示してあります。
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。